

配信先：大阪科学・大学記者クラブ、文部科学記者会、科学記者会

2025 年 11 月 12 日
大阪公立大学

呼吸調節機能不全症の有病率が 11%であることが判明

<ポイント>

- ◇約 30,000 人を対象にした調査で、呼吸調節機能不全症（dysfunctional breathing, DB）が比較的一般的な疾患である可能性を示唆。
- ◇呼吸器疾患以外（てんかん・脳血管疾患など）も DB との関連を確認。
- ◇喫煙および呼吸器疾患の存在が、DB の有病率をさらに上昇させる要因であることが判明。

<概要>

息がしづらい、胸のあたりが苦しい、頻繁なあくびが出るなどの症状がある、呼吸調節機能不全症（dysfunctional breathing, DB）は、医学的には認識されていますが、一般にはまだ広く知られていません。また、すでに呼吸器疾患を持つ患者における DB に関する報告はありますが、一般集団における DB の有病率や臨床的特徴は未だ解明されていません。

大阪公立大学大学院医学研究科 呼吸器内科学の平位 佳歩大学院生（博士課程 4 年）、山田 一宏講師、浅井 一久准教授らの研究グループは、2024 年 1 月 24 日から 2 月 27 日の間に実施されたインターネット調査 JASTIS2024 の結果を用いて、男女 29,268 人を対象に DB の有病率を解析しました。その結果、DB の有病率は 11.0%であることが分かりました。また、呼吸器以外（てんかんや脳血管疾患など）の疾患も DB と関連が認められ、これらの結果から、一般集団において DB は比較的一般的な疾患である可能性が示唆されました。さらに、喫煙と呼吸器疾患の存在が DB の有病率をさらに上昇させることが判明しました。

本研究成果は、2025 年 11 月 12 日に国際学術誌「Respiratory investigation」にオンライン掲載されました。

<掲載誌情報>

【発表雑誌】Respiratory investigation

【論文名】Prevalence of dysfunctional breathing in the Japanese community and the involvement of tobacco use status: The JASTIS study 2024

【著者】Kaho Hirai, Kazuhiro Yamada, Kazuhisa Asai, Masaya Tsutsumi, Takahiro Ueda, Erika Toyokura, Yuichiro Furukawa, Atsushi Miyamoto, Misako Nishimura, Kanako Sato, Tetsuya Watanabe, Shuichiro Maruoka, Yasuhiro Gon, Takahiro Tabuchi, Tomoya Kawaguchi

【掲載 URL】<https://doi.org/10.1016/j.resinv.2025.10.002>

<平位 佳歩大学院生のコメント>

本研究により、呼吸調節機能不全症（dysfunctional breathing, DB）が一般集団において 11%も認められることを示しました。約 3 万人のデータ解析には困難を伴いましたが、DB が認識されるきっかけとなれば幸いです。

<研究の背景>

呼吸調節機能不全症（dysfunctional breathing, DB）は呼吸困難、過換気、頻繁なあくび、胸部圧迫感などの症状が断続的または慢性に起きる疾患です。これらの症状により健康関連の生活の質が損なわれる可能性があります。現時点でDBは十分に認識されておらず、誤診や過小診断が頻繁に起きています。近年、気管支喘息や慢性閉塞性肺疾患（COPD）におけるDBに関しての報告が散見されますが、一般集団におけるDBの有病率や臨床的特徴は明らかになっていません。

<研究の内容>

本研究では、全国規模のインターネット調査である The Japan Society and New tobacco Internet Survey（JASTIS）のデータを使用し、2024年1月24日から2月27日の間に実施されたJASTIS2024の結果を用いてDBグループ非DBグループのそれぞれ3,207人と26,061人の参加者を含む、29,268人を対象に単変量ロジスティック解析*を行いました。その結果、DBの有病率は11.0%であり、呼吸器疾患とDBの存在には有意な関連が認められました。加えて、てんかんや脳血管疾患などの非呼吸器系疾患においてもDBと関連が認められました。これらの結果から、一般集団においてDBは比較的一般的な疾患である可能性が示唆されました。また、喫煙と呼吸器疾患の存在がDBの有病率をさらに上昇させることも判明しました。

<期待される効果・今後の展開>

本研究結果は、DBが一般集団において比較的一般であることを示しました。今後は喫煙や各種疾患とDBとの因果関係などを解明し、臨床現場に役立つ知見へと発展させていきたいと考えています。

<資金情報>

本研究は、日本大学、東北大学との共同研究として実施したものであり、第一三共ヘルスケア株式会社、ジョンソンアンドジョンソン株式会社、株式会社データシード、ワークアウトプラス合同会社、厚生労働省科学研究費補助金(23FA1004, 23EA1001)、科学研究費助成事業(25H01079, 24H00663, 23H03160)の支援を受けて実施しました。

<用語説明>

※ 単変量ロジスティック解析：単一の説明変数(それぞれの併存疾患)が目的変数(DBの有無)に与える影響を調べる解析。

【研究内容に関する問い合わせ先】

大阪公立大学大学院医学研究科呼吸器内科学
准教授 浅井 一久（あさい かずひさ）

TEL：06-6645-3916

E-mail：kazuasai@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】

大阪公立大学 広報課

担当：橋本

TEL：06-6967-1834

E-mail：koho-list@ml.omu.ac.jp